

雪ノ下雪乃の妹

銀花ちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

雪ノ下には姉がいることはご存知だろう。

しかし、妹がいることはあまり知られていない。

圧倒的な才能の雪ノ下陽乃と完璧主義者の雪ノ下雪乃の妹とは一体？

※これは雪ノ下雪乃に妹がいたら、という二次創作です。ゆきのんには確か妹はいません。ご注意ください。

目次

E P.	1	彼女は編入する。	1
E P.	2	彼女と彼の会合	4
E P.	3	そうして彼女と姉は会う。	8
E P.	4	彼らはそうして考える。	12
E P.	5	彼女の笑顔を初めて見た日	16
E P.	5	彼女と俺の教室での出来事	21
E P.	6	彼女の夏休みは始まったばかり	24

EP. 1 彼女は編入する。

平塚先生に頼まれていた資料を運んでいるとき、曲がり角で誰かとぶつかった。

盛大にドンツとぶつかったため私は尻餅をつく。

「Oh, sorry. Are you okay? Are you injured?」

「へ……?」

綺麗なソプラノ声で紡がれた突然の英語に私は驚く。

きよとんとしている目の前の綺麗な彼女。しばらくすると、ああと一人納得したようで改めて私に話しかける。

「大丈夫? 怪我はない?」

「え、うん。大丈夫だよ。そっちこそ怪我はない?」

「うん。別に怪我はないよ」

髪を耳にかけながらそういう彼女はどこか見覚えがあつて、思わず口出てしまった。

「……ゆきのん?」

「? ゆきのん? 誰?」

まただ。

また、どこかゆきのんに似ているところがある。

ふと、よく見れば髪の色も顔の形もよく似ている。性格はゆきのんに比べて少しドライで髪も少しゆきのんより短いけど、そこを除けばほとんどゆきのんとあまり変わらない。

「ん? ああ、もうこんな時間。ごめんなさい、私はもう行かないといけないから。じゃあ、またね」

腕時計を確認してから彼女はそう言い、くるりと身をひるがえしてこちらを一切振り向かずどこかへ向かっていった。

本当に彼女は、雪ノ下雪乃とよく似ていた。



「ふむ、なんというのか……雪ノ下夏乃か。なんともまあまた面倒な生徒が転校してきたものだ」

デスクの上に置かれている書類を見れば、雪ノ下雪乃にとっても似た女子生徒の写真が貼られているものが一枚置いてある。

その書類を見て私はため息をつく。

イギリスの学校から来た書類を見ると、
「Although excellent,
she has no cooperativeness,
both herself and hers are strict.
と書かれている。」

これがすべて物語っているように、彼女には協調性のかけらがまるで見られない。多数で行動するよりも一人で行動することを好む。まるで目の腐ったあの生徒のように。

となると、彼女も「奉仕部」へ入れるべきだろうか。

「失礼します。平塚先生はどちらにいらっしやいますか？」
「ここだ」

噂をすればなんとやら、と呼び出していた彼女が来たらしい。とりあえず適当に理由をでっちあげて入れるとしよう。

「それで、どうしてここへ私を？ というより、私は一応この学生ですけどまだ正式に入っているわけではないはずですけど。一応今日は下見としてきているだけだというのは先生もご存じのはずですが」
相変わらずのこの態度である。教師に対して敬いの一つすらないとは。

「いや、君言うことがあってだな」

私の言葉に頭に？を浮かべながらこちらを見つめる夏乃。

「たった今、イギリスの学校から君の資料が来たのだがな。うむ、君は

少し人格面で問題があるようだ。となると、君にはとある部活動に入ってもらふことにする」

「……それ今適当に作った理由とかじゃないですか？ まあ別に私としてはどちらでもいいんですけど」

彼女は、こちらをジト目で見ながらため息を吐き、うなずく。

「君は次の週から学校に来る予定だったな」

「ええ、そうですね。とはいっても残り三日ぐらいですけど」

皮肉を込めながら返してくる。相変わらず愛想がない奴め。

「では、その時に部室へ案内するでしょう。では気を付けて帰りましたま
え」

「わかりました。では失礼します」

そういつて彼女は職員室から出ていく。

彼女も彼と出会ったら変わっていくのだろうか。

少し楽しみな私もいる。

EP. 2 彼女と彼の会合

転校初日。

平塚先生に連れられて、F組と書かれている教室の前に来た。てかあなたがHRの担当なんですね。

「雪ノ下、私が呼んだら入ってくるように」

一言、そういうと先生は教室へ入っていった。

後姿はなんともかっこよかったけど、普段の様子を思い浮かべると、やっぱりなあとなる。

「では、入ってこい」

これが合図だろう。そう思った私は教室の扉を開けて入る。それと同時に私に向けられる好奇の視線。

それらの視線を無視して、先生の隣、ちょうど教卓の前まで歩く。

「自己紹介」

一言だけそういわれた。単語しかないその簡素な説明に呆れながらも、口を開く。

「どうも、雪ノ下夏乃です。変な時期に編入してきましたがよろしくお願ひします」

自己紹介はシンプルに。余計な情報は伏せて、必要なことだけを言う。

これからクラスメイトになるであろう人達を見ていると、何やら待ち望んだ顔をしている。

まさかだけど、まだ自己紹介が続くとも思っているのだろうか。

「はあ……。以上です」

私がそう言うのと周囲からえー、といった落胆の声が聞こえる。

「ちなみに雪ノ下はイギリスから来た。いわゆる帰国子女というやつだな。英語が苦手な生徒は聞きに行くといい」

先生の言葉に驚く。余計なことをしてくれたものだ。別に帰国子女ということを隠していたわけではないが、これで本当に英語を聞きに来る生徒がいたらこちらとしても対応に困る。

「まだ少し時間が残っているな……。よし、質問時間とする。質問し

たい人は挙手するように」

先生の言葉に反応するように、いくつか手が上がる。

「ではまあ適当に。由比ヶ浜」

先生に指名された生徒は明るい茶髪のどこか見覚えがある女の子だった。

「は、はい！ ゆきの、雪ノ下さんは姉か妹はいるんですか？」

「……これって答えなきゃダメで……ナンデモナイデス」

教卓で巧妙に隠れているが、この教師握りこぶしを握っていた。どうやら答えないとそのこぶしを私のおなかにクリーンヒットさせるらしい。

「……姉が二人います。とはいっても一人は誕生日が少し違うだけで同じ年ですが」

正確には数分。姉がぎりぎり3日で、私がちょうど4日。雪が降る日だったらしいけど私は覚えていない。

とはいえ、こういう情報を答えるのは好きではないので、最低限の情報だけ答える。

「もしかして雪乃って名前じゃ？」

ぴくつときた。

あまり聞きたいとは思わない名前の一つだ。

だから思わず声が低くなってしまった。我ながらまだ幼稚だった。

「どうしてその名が？」

本当に幼稚だ。

ただの嫉妬を誰かに当てるなんて、本当に醜い。

教室の空気が明らかに変わった。少し和やかな雰囲気、冷たく喋る者を刺すような冷たくて鋭い空気に。

「……ふう。ごめんなさい、少し頭に血が上ってしまった」

「とりあえず自己紹介はここまででいいな。では解散」

先生の言葉にみんなが各々が席を立ったり、机の上に次の時間に使う教科書を用意し始めた。

「雪ノ下。言うのを忘れていたが、お前の席はあそこだ」

先生がそう言って指さしたのは伏せている生徒の隣の席。

「どうしてあそこだけ空いているのでしょうか？」

廊下側の前から三番目の席って空くことはないと思うんだけど。

「それは知らん」

教師としてそれはどうなのでしょう？



目が覚めて、隣を見ると、知らぬ人。

川柳ができた。川柳と俳句の違いは季語があるか、ないかだから覚えておくと得だ。それはともかく、目が覚めて隣を見たら本当に知らない人がいた。噂の転校生とやらなのだろうか。

じつと見ているとふと、その横顔には見覚えを感じた。つい最近、ずっと見ていた何かのような感じだった。

「人の顔を見て何をしているの？もしかして趣味が人間観察？」
人を小ばかにするような感じの言いように、声音。本当に聞き覚えがある。

「聞いているの？人の話は聞くものよ。小さいころ習わなかったかしら？」

呆れた目でこちらを見てくる彼女に、ようやく言葉が出る。

「あいにくと小さいころ教えてくれるような人が身近にいなかったんだよ」

我ながら悲しくなる皮肉。相手に皮肉を吐くと自分にもダメージが返ってくるってどういうことなんでしょう？

「そうだったの。ところであなたの名前は？」

俺の皮肉をそう、の一言でスルーするところ、本当に興味がなさそうですね！

「人に名前を尋ねるときはまず自分からって小さいころ習わなかったの？」

先ほど、彼女が言ったセリフを返す。

呆れた目で見ていた彼女が今度は驚いた眼でこちらを見つめる。

「さつき自己紹介したんだけど……。もしかして聞いていなかった？」

「まじっ？」

「まじよ」

「……………」

「……………」

しばらく沈黙が流れる。

そのうち、彼女がため息をつき、口を開く。

「雪ノ下夏乃。あなたは？」

「比企谷八幡。……雪ノ下？」

雪ノ下ってあの雪ノ下か？ J組の奉仕部部长で、よく人に皮肉ばかり言うあの氷の女王の名字か？

「もしかしてお前、姉か妹に雪乃って名前のやついないか？」

「いるよ、姉だよ。本当に何も聞いていないっぽいね」

彼女が首を振ると同時にチャイムが鳴り響く。

心なしかその顔は険しい。もしかして俺は地雷を踏んだ？

そんな雰囲気壊すようにチャイムが鳴り響り続ける。今回ばかりはナイスとしか言えない。

「知ってる？ よく聞く学校のチャイムの音はイギリスのビツクベンの鐘の音が元ネタなんだよ」

彼女はそれだけ言うと、前を向いて授業の支度を始めた。

こうしてみると彼女は雪ノ下の妹だけあって、よく似ている。横顔なんてまさに雪ノ下だ。髪の毛の長さはどちらかというが陽乃さんに似ているが、雰囲気は雪ノ下の鋭利な感じにとても似ている。が、陽乃さんにどことなく似ているところがある。

今のところ、苦手ではないが、得意でもないといった感じだろうか。まあどちらにせよ、あまり俺と関わることはないと思うが。

EP. 3 そうして彼女と姉は会う。

何事もなく午前、午後の授業が終わり放課後になった。

和気あいあいと帰る人たちを眺めながら、カバンに荷物を入れていつもの部室へ行く準備をする。

そういえば、と思い隣を見るとすでにどこかへ行っているのか席にはもう居なかった。いつの間に消えたのだろうか。まだ終わってから二分経っていないがはやくないだろうか。

まあ、彼女にも用事があるのだろう。

そう考えた俺は、早足に部室へ向かうことにした。



平塚先生に言われた言葉に私は冷静さを保てないでいた。

『今日、君の妹が奉仕部へ入部する』

私の妹、夏乃とは数年前に喧嘩して以来久しぶりに顔を合わせる。そもそも帰ってきていることすら知らなかった。妹の連絡先を知らないというのもあるけどやはり少し悲しい。

姉さんのほうは妹が帰国していることを知っているのだろうか。

「ゆきのんどうしたの？　なんか落ち着きがないみたいだけど」

そわそわしていた私に気付いたのだろうか、心配そうな目でこちらを見てくる由比ヶ浜さん。

「いえ、なんでもないわ」

そう答えると、一層心配そうな顔になる。

「本当に何でもないの？」

震えるような声、例えるならそう、親に見捨てられそうな子犬のような感じで私に言う。

「ええ、本当に大丈夫よ。……でも心配してくれてありがとう」

「ゆきのん！」

小声で言ったつもりだったけど、どうやら聞こえていたらしい。由比ヶ浜さんが私に抱き着いてくる。暑いと言っても放してくれないからしばらくはこうなるだろうと覚悟していると、部室の扉が開く音が聞こえる。

扉のほうに視線を向けると、腐った目の生徒がこちらを見ながら突っ立っていた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………失礼しました」

「ちよつと待ちなさい」

とりあえずあの男の誤解を解かねば。

◇

◇

◇

部室の扉が開く。

「失礼するぞ」

「先生、毎回言っていますがノックを」

何度言っても直す気がなさそうな平塚先生に注意をする。

「そんなことより、雪ノ下。新入部員だ」

先生のその言葉に、ドクンとする。

ついに来る。数年ぶりに妹と対面する。

そう思うと、鼓動が早くなるのを感じる。

「入ってきたまえ」

「失礼します」

記憶にある声と少し違う、少しだけ大人びな声が聞こえる。

開いている扉から入ってくるのは。

「……………夏乃っ」

私の声に反応した夏乃は、びっくりと肩を揺らしてからこちらを見つめる。

しばらくこちらを見たのち、平塚先生のほうに向き、ジト目で口を開く。

「先生、狙いました？」

どこか怒気を含んだ声だった。

まだ。夏乃はまだ数年前のことを許していない。

数年前に口に出してしまった言葉を、夏乃はまだ許してはいない。

「……帰らせてもらいます」

静かで、尚且つ敵意を含んだ声でそう言って夏乃は部室から去っていった。



「うむ。やはりこうなったか」

口に手を当てながら平塚先生が口を開く。

「分かっててやったんですか？」

「待て。雪ノ下、そう怒るな。これも計算のうちだ。これでいわゆるフラグが立った」

無意識に怒気を含んでいたらしい。いや、正確には八つ当たりに近い何か。我ながらまだ稚拙だ。

それよりもフラグ？ 何を言っているのだろうか。

「ゲームのやりすぎだろ……。そんな簡単にフラグが立つわけないだろ」

「そうでもないぞ。改めてここで雪ノ下夏乃の雪ノ下雪乃に対しての認識を確認するのは意味がある」

真面目にこちらを見ながらそういう平塚先生。

「では、私からの依頼だ。雪ノ下夏乃を奉仕部に入部させたまえ」

平塚先生は、そう高らかに宣言した。

EP. 4 彼らはそうして考える。

「とは言っても、具体的にはどうすればいいんですかね」

高らかに宣言する平塚先生を見ながら俺はそう言う。

現状を見る限り、雪ノ下夏乃をこの奉仕部へ入部させることは不可能に近い。

あいつが雪ノ下をどう思っているのかはよく分からないが、先ほどの態度を見るにいいようには思っていないことは明らかだろう。

仲直りすればその限りでもないはずだが、そもそもそんな簡単に仲直りできているならこんな状況にはなっていないはずだ。

「正直、今回の依頼は今までやってきた中でも特に難しいと思いますよ。そもそもマイナスから始まっている。それにそのマイナスをプラスにする方法は限りなく難しい」

今回の一件で、平塚先生とこの奉仕部に対していい印象を持っているはずがない。

それにあの敵意を込めた目、間違いなくこちらを敵として認識している。

「この条件であいつを入部させるのは至難の業、としか言えませんよ」というかほとんど無理。難易度的に言うなら、RPGのラストまで一度もエンカウントがないまま行くレベルで無理。

俺のこの一言に、場は完全に静まる。

平塚先生も難しい顔をしながら目をつぶり、雪ノ下も完全に意気消沈している。由比ヶ浜は、おろおろとしている。

「そろそろ夏休みだし、それを利用してどうかなっ!」

この空気に我慢できなくなったのか、由比ヶ浜がそう提案する。

「そういえばそろそろ夏休みだな。……で、それでなにをやるんだ?」

確かにそろそろ夏休みだ。それを利用しようとする由比ヶ浜の提案自体は悪いものではない。だが、その夏休みをどう利用し、雪ノ下夏乃をこの奉仕部へ入部させるか、というのがこの依頼では一番大事だ。

「それは……」

「そもそもだ。どうやってあいつを夏休みに誘うんだ？」

「ううっ……」

そもそも前提条件からして怪しいのだ。

どうやってあいつを夏休み中に誘うのか、敵視されているのは間違いないのだから断られるのは間違いないだろう。

「ふむ……。それに関しては私に任せたまえ」

嫌な予感がするんですけど……、今回は平塚先生に頼るのも悪くないだろう。

「では任せます」

意気消沈状態だった雪ノ下が復旧したのか、平塚先生にそう返す。

「では私は一度職員室に戻る」

どうしようと平塚先生は部室から出ていく。

「では私たちも今日は解散にしましょうか」

「そうだな」

雪ノ下の提案にのる。

時計を見るとすでにいつも終わる時間を過ぎていた。

いそいそと支度をし、カバンを持って部室から出る。

「比企谷くん」

「あ?」

声を掛けられて足を止め、振り返る。

「また……明日」

雪ノ下からかけられた声になんて答えればいいのか、すぐに思い浮かばなくて、

「お、おう」

そんな感じの返事しかできなかった。



最悪。

最悪、最悪、最悪、最悪。

よりにもよって会いたくないやつ筆頭に会うとは思っていないなかった。

雪ノ下雪乃。書類上では私の姉に当たるそいつは、久しぶりに会ってもあまり変わっていないかった。

数年前、私が渡英する少し前に喧嘩して以来の会合で、顔を見るたびに昔のことを思い出す。

その度に、胸が熱くなって感情が高まる。我ながら子どももみたい。数年前、言われたあの言葉はいまだに私の中で渦巻く。毒のようにじわじわと、呪いのようにいつまでも、私を苦しめ、悩ませ、そうして冷静な判断をできなくさせる。

放課後の図書室で一人ため息を吐く。

外を見ればもうすでに日が傾いてきているのか、だんだんと薄暗くなってきた。とは言ってもまだ十分明るいが。

「夏乃、少しいいか？」

放課後の図書室でふと聞き覚えのある声を耳にする。

声の方向を見れば、先ほど私に最悪の思いをさせた教師がいた。

「平塚先生ですか。一体なんのようですか？」

「もう七時になるぞ。いつまで学校にいるんだ、まったく」

「はあ……？ そんなことを伝えに来たんですか？」

「いや、本題はこっちでね。それは一応形式みたいなものだ」

笑いながら言う先生の姿を見ると、悪い人には見えなかった。

「そろそろ夏休みだが、予定はあるか？」

思い出したかのように本題を告げる平塚先生。

「そういえば、と思い今日の日付を思い出すとを思い出すと、すでに七月の上旬だった。」

「いえ、まだ特に決まっていませんが」

「そうか、それはちようどいいな。君に頼みたいことがある」

「はあ……」

平塚先生が手に持っていた一枚の紙を私に渡してくる。

「これは？」

「夏休みに行くボランティア活動だ。君に手伝ってもらいたい」

紙を見ると確かにボランティアと書かれている。

内容を要約すると小学生の林間学校のスタッフみたいな感じだ。

「私にメリットは何かありますか？」

「そうだな。一応内申点をあげてもいいことになっている」

内心で釣るのはいかなものだとは思いますが、まあそれはどうでもいい。

「……そうですね。何を企んでるかわかりませんが、今回はその口車に乗ってあげましょう」

きっと未来の自分はここで断っておくのがいいと言っただろう。なにせ嫌な予感がする。途轍もなく、途方もなく嫌な予感がする。

——それは最悪の形で当たってしまう。

EP. 5 彼女の笑顔を初めて見た日

夏休みもだんだん近づいてきた。周りのパリピも陽キャも目に見えるぐらいテンションが上がっている。そのためいつも以上に騒がしい。

だが、忘れてはいけない。

夏休みが近づいているということは、期末テストも近づいているということであることに。

学生たちの苦行の門であるテストという概念。俺は常日頃勉強しているから問題ないが(数学以外)、他の生徒はあまりうれいとは思わないだろう。せいぜい苦しむがいい(数学赤点)



放課後のチャイムが鳴り、今日の全ての課程が終わったことを告げる。

わいわいと騒ぎながらも各々がカバンを持ち、下校の準備をする。それをしり目に俺も帰宅準備をする、というかした。

カバンを肩にかけてから教室を出ると、ちようどあいつがいた。

「ん?」

「……あ」

お互いに顔を合わせて数瞬固まる。

相変わらず綺麗な顔をしている彼女は嫌でも雪ノ下の家の血を引いていることを分からせる。

「……比企谷八幡だね? 奉仕部とやらの部室にいた唯一の男子生徒の」

「お、おう」

認識されていたのか……(歓喜)

話す限り特にこちらに対して悪い印象を抱いているイメージはなさそうだ。

綺麗な顔でじつと見つめてくる。美人に見つめられると照れる。

「……………腐った魚の目……………」

純粹無垢な瞳でそう言われた。

悪気は全くなさそうなのが余計に質が悪い。

「うるせえ、これは生まれつきだ」

「それはともかく、どうして私の後ろについてくるの？」

本当にこいつ興味がないことはさらっと流すよな。こんなような出来事、つい先日もした気がする。

「昇降口こつちだろうが」

頭の上に？を浮かべた顔で数瞬、ああ、と納得した顔でうなずく目の前の彼女。

こいつ実は天然とかじゃねえのか？

「そういえば、今日は帰るのが遅いよな」

「まだ帰らないよ」

呆れたようにそう言う彼女は、ふと思いついたように手を叩いた。

「そうだ。えつと、八幡。図書室の場所を教えてくださいかないかな？」

「え？ ……ああ、別にいいけど。どうして俺？」

風で靡いた髪をはためかせて、自嘲気味に笑う彼女はこう言った。

「私、知り合いいないのよ」

何とも悲しい理由である。



「ここが図書室な。じゃあな」

図書室の場所をさつさと教え、帰ろうとすると襟を捕まれる。

「ちよつと待って。国語学年三位さん」

「ぐえっ」

まだ何か必要なんですかねえ？

ていうかなんでそれを知ってるんでしょうか！ 私、気になります

!

「ちよつと前にやったテストの結果から推測しただけだよ」

「いや、心の中を読むなよ」

「読んでないよ。顔に書いてあつただけ」

「図書室にある机に、カバンを置きながらそう言う彼女。」

「で、お前は何が目的で俺を呼び止めたんだ?」

「お前じゃない。別に夏乃って呼んでもらつて構わないよ」

「じゃあ、夏乃。何の用だ?」

「……です。名前を呼ぶようになったわけだが、雪ノ下じゃダメ
……ですね。雪ノ下じゃ、姉のほうと被るな。」

「少し勉強を教えてもらおうと思つて」

「は?」

夏乃が? 俺に? 勉強を教えてもらうのか? 教える、じゃなく
て?」

「勘違いしてるようだけど、私は姉と同じように優秀というわけじゃないよ」

「愁いを帯びた顔でそう言う夏乃。」

「私は、姉たちと比べて平凡だからね。追いつくには人一倍努力しなきゃいけないんだよ」

「椅子に座つて、カバンの中から勉強道具を出しながらそう語る。」

「だから、普段からちゃんと勉強しないとね。一日でも怠るとそれだけ差ができちやう」

「優秀な姉たちと、凡才の自分。」

「そんな生活をしていたら一体どうなるのか、なんていうのは予想ができる。」

「苦しんで苦しんで苦しんで。」

「そしていつか壊れてしまうのだろう。」

「さ、さっさと始めましょう。時間は有限だからね、有効的に使わないと」



期末テストも終わり、次の日。

今回は数学比較的に良かった気がする。教えてくれた夏乃に感謝をしないと。

テストもすでにほとんどが返ってきており、残すところ国語のみとなっていた。

「なんか気分がよさそうだね。どうしたの？」

「ああ、数学が赤点じゃなかったんだ。教えてくれてありがとな」

「別にいいよ。私も国語少し教えてもらったし。等価交換だよ」

とか言いながらも少し耳が赤くなっているところを見るとまったく素直じゃないな、と思う。

「それよりお前はどんな感じだ？」

「まったくもって最悪。満点が一切ない。これじゃ総合で負けるかな」

憎々しげに言う夏乃の姿を見ると、本当にこいつは雪ノ下に対して敵意を持っているんだな、と思う。

そういえば、そういえばだけど。

「どうしてお前は俺に構うんだ？ お前は奉仕部を敵と思っていないのか？」

平塚先生に連れられて、雪ノ下夏乃は奉仕部へ来た。そこで因縁とも言える雪ノ下雪乃と出会い、そして間違いなく奉仕部へ敵意を持たはずだ。

「ん？ ああ、勘違いしてるわけね。私は奉仕部単体へは別になんとも思っていないよ。何か直接害を受けたわけではないし」

つまり、この言葉から推測できるのは。

「あの部室には雪ノ下雪乃がいた、それだけ」

つまり、今までののは俺の勘違いだったわけで。

あくまでも、雪ノ下夏乃が奉仕部に入らない理由は、雪ノ下雪乃が

いるため。奉仕部に対しては特に何も抱いていない、ということなのか。

「まあ平塚先生にも少し怒っているけどね」

あんなことされたのに少しだけなのか。

しかし、顔を見る限り嘘をついている気配は全くなさそうだ。

「さ、席に着いたら？ そろそろ授業だよ。平塚先生に怒られたくないならさっさと準備しないとね」

最初にあつた時と比べて、幾分も柔らかくなった笑顔と雰囲気。それはきつと見る者を惚れさせてしまうであろうもので。

——俺はこの時、初めて彼女の笑顔を見た。

EP. 5. 5 彼女と俺の教室での出来事

期末テストも終わり、あとは夏休みが訪れるのを待つだけになった。

相変わらず、周りは夏休みにどこに行く、とか夏休みに一緒に遊ぶ、とかいろいろ言っている。

隣にいるあいつは、そんなこと知ったこっちゃないと、前の時間からずっと本を読み続けている。

「そういえばお前、夏休みになんか用事あるのか？」

ふと、そういえばと思い隣の夏乃に聞いてみる。

本に向いていた視線が、こちらに移り変わる。

「特に何も無いよ。私こっちに来てからまだ知り合いという知り合いがあまりいないし」

それだけ言うと、再び本に視線を向ける。

何とも悲しい理由だった。というか、俺もそんな感じだから人のことは言えないと思いましたがまる。

「……そういえば頼まれごとがあつた。まあ用事といえば用事なのかな」

思い出したかのように再び視線を上に向けてから言う。

頼まれごとねえ……。一応用事といえば用事だからアウトよりのセーフって感じで。

「あなたは……そうだね、なんか面倒ごとに関わりそう」

「現実になりそうだからやめてくれ」

マジで。

こいつが言うのと洒落なんない。マジで夏休みに何かありそうだ。

「やめてよね。私が疫病神みたいな言い方」

「実際そうだろう」

「そんなわけないでしょ。私はまだ面倒事を運んできた覚えはないよ」

いえ。現在進行形で運んでいます。

とは言えないのでこの喉元まで出かけた言葉をぐっと飲み込む。

「……休日のお前って何してるんだ？」

ぐつとこらえて、何か他に言葉はないか、と考えてぱつと出た言葉を代わりに出す。

その言葉を聞いて、一度こちらに視線を向けて、はて？ となつてからああ、と一人で納得し、その視線を本に戻す。

「そうだね。家で勉強か読書をしているかな。あとは……飼っているうさぎの世話かな？」

視線を本のまま、夏乃はそう答える。

とうかあなたペットを飼っていたんですか。意外ですね！

「うさぎ飼ってるんだな」

「ええ、うさぎ。可愛いよ」

微笑みながら（ただし、視線は本のまま）言うその姿をクラスの数人の男子に見られたのか、周りの男子たちを見ると、少し顔を赤くして夏乃を見つめていた。

それにしても、

「そうか、お前はうさぎ派なのか」

「？ なにか言った？」

雪ノ下が猫だったのに対して夏乃はうさぎ派らしい。顔のパーツは本当に似ているのにこういうところは似てないみたいだ。

「それはそうと、八幡の家では猫でも飼ってるの？」

顔をしかめながら俺にそう聞いてくる夏乃。いきなりそんな顔をしてどうしたのだろうか？

「そうだが……どうした？」

「……きみの制服に猫の毛がついているよ。私は猫アレルギーじゃないけど、ほかの生徒が猫アレルギーだった場合に大変なことになるよ。気をつけなさい」

そういうながら俺の制服に手を伸ばして、先ほど言った猫の毛を取ろうとするが、手の長さが足りなかったのか、はあと息を吐きながら立ち上がってこちらに近づいてくる。

近い。近い。近い。

夏乃の体から柑橘系の香水の匂いがする。つけすぎ、というわけで

はなくちようどよいい感じで、夏乃本来の匂いと相まって、心地が良
い匂いだ。

って、なんで俺はこんな変態的なことを考えているんだ。

「……………取れたよ。ってどうしたの？ そんな顔して？」

「いや、なんでもねえ。ああ、何でもないんだ、何でもない」

「？ そう。あなたの心情なんてもどうでもいいんだけど、制服はちや
んと清潔にしなさい」

こういうところは雪ノ下にとても似ているな、と思いました。

EP. 6 彼女の夏休みは始まったばかり

終了式が終わり、夏休みが来た。

とはいえ、夏休みでも規則正しい生活を心掛ける。そうしないと始業式の時に起きれずに遅刻してしまいそうだから。

時計を見れば六時ちよつと過ぎ。覚醒してない頭を目ざますために、洗面所に向かう。

洗面所の水道の蛇口を捻り、冷たい水を手ですくう。

「つめたっ」

思った以上に冷たく、脳は冴えた。だけど目がまだ重たくて、気を抜けばすぐこの場でも寝てしまいそうだ。

冷たいのを我慢し顔を洗い、歯磨きをして、鏡を見ればいつも通りの私。

「よし」

頬を叩き、今日一日の予定を頭の中に浮かべる。

毎日勉強をしているとかえって効率が悪くなるため、定期的に休暇を挟むのが大事だ。だからとりあえず今日は一日、やりたいことをやる。

「ん？」

歩こうと思い、足を動かそうとすると、なにやら気持ちのいい感触。そういえば、まだあの子に餌をあげてないな、そう思いながら下を見ると、案の定白いモフモフしたやつがいた。

「あ、ぴよん吉。どうしたの？」

ふんすつ、と言わんばかりにこちらを見つめるぴよん吉(♀)。

撫でてほしいのだろうか？ そう思い屈んで撫でる。

「相変わらずモフモフしてるね」

撫でてあげると、ご機嫌がよくなってきたぴよん吉。音符を出している姿を幻視する。

そのまま抱きかかえてから台所に向かう。

「りんごがある。少し切つてからあげようかな」

あまり多くは与えちゃいないんだけどね。

抱えていたぴよん吉を下ろし、手を洗ってからりんごをまな板に置き、包丁を取り出す。

「切り方は……スティック状でいいかな」

皮を剥いてからトン、トンとりんごを切る。小指程度の太さのりんごを複数個切り終えて、残りのりんごは四分の一にして、別のお皿に盛る。

そのまま、冷蔵庫からたまねぎと、乾燥わかめ、豆腐、味噌と長ネギと鮭を取り出してから閉じる。

「ついでに朝食も作ろう」



朝食を食べ終えて、後片付けを終わらして、テレビを見てみると携帯が震える。

「誰から?」

地味に座ったままじゃ届かないから、面倒だけど立ってから携帯を取り、メールを確認する。

『平塚静』

そう書かれていた。多分、というか絶対前聞いたボランティアのことだろう。

『おはようございます。朝早く失礼します。前にお伝えしたボランティアの日程を伝え忘れていたのでメールでお伝えします。』

場所 千葉駅前のバスロータリー

日程……………」

……誰?」

平塚先生からきたメールだけどメールでの口調が、いつもの口調と違って別人から来たメールのように感じる。

日程のほうは理解したので携帯を閉じた。

横を見るとぴよん吉がこちらを見つめていた。

「どうしたの？ 可愛いなあ」

自然と頬が緩むのを自覚する。仕方ないね、うさぎ可愛いから。撫でていたらぴよん吉がどこかへ行ってしまった。

仕方ないので今日はおとなしく本でも読んでようと思い、本棚に向かうところでふと気づいた。

そういえば、今日発売の小説があった。ということで、今日の予定が決まった。



十分ほどバスで揺られてから目的の場所へ着いた。

アウトレットモールの中にある本屋に、目的の本がある。

本屋に入ろうとしたとき、ふと見知った影が見えた。

「八幡……？」

無意識につぶやいた言葉にその影がビクツと反応をしてから、周りをキョロキョロする。

「聞こえたんだ……、驚いた」

キョロキョロしている彼を見るのは少し面白いが、はたから見ればただの不審者、というか変質者に近い。知った顔が新聞に載ったら困るので、彼に近づく。

「こつちだよ、八幡。久しぶり」

私が声をかければ、驚いた顔をした八幡がこちらを見る。

「お前だったのか……」

「失礼だね」

結構、というか相当失礼な言い方ではないだろうか。休日、というか長期休みに女の子と会うなんてあまりない出来事だと思うんだけど。

「ところで、私の声聞こえたんだ」

「ボッチはな、自分を呼ぶ声には敏感なんだよ」

「へー、初めて知った」

「お前、本当に興味ないのにはとことん無関心を貫くな」

まあ、そんなことはどうでもいいんだけど、と私はふと思ったことを聞くことにした。

「八幡はどうしてここにいるの？ 視姦？」

「雪ノ下家は どうして俺を変態扱いするんだよ」

「違うの。良かった、知り合いが新聞に載ってたらどう反応すればいいのかわからなかったからね。で、何しに来たの？」

「あれだ、妹の参考書を買いに来た」
なるほど。筋が通ってる。

確かにこの本屋なら参考書程度だったら売っているはずだから、普段彼が家に籠っているとしても、このアウトレットモールに来るのも納得できる。

「ちようどいいね。私も本屋に用事があるんだ。一緒に行こう」
「は？」

私がそう言うと、彼は拍子抜けた声を出した。正直ってそんな声を出されてもどう反応すればいいのかわからないんだけど。

「……もしかして嫌だった？」

「や、別に嫌というわけではないけど……」

「じゃあ、決まりだね。一緒に行こうか」



当初の目的の本屋に着いた。久しぶりに来たけど、配置はあまり変わっていないそうだ。

「ところでさ、八幡は参考書の位置分かるの？」

「いや、まったく」

即答で返された。

そんなに早いところからも困る。

「……………私も一緒に探すよ」

「助かる」

とりあえず、二手に分かれることになったから、彼とは逆の方向へ向かう。主目的は目的の本だ。

八幡はノベルスのほうに行ったから、とりあえずその裏の文庫のほうに行っておく。あくまでも私の目的の本がメインである。

「んー、あった」

目的の本をあつさり探し終えた。とりあえず目的は達成できたから、次は八幡の目的の本を探すことにする。

「探すのはいいけど、どんな本を探してるんだろ」

忘れていた。八幡がどんな本を探しているのか、私は全く知らなかった。

とりえあずうしろにいる八幡に聞かないと私は何を探せばいいのかわからなくて、時間を無駄に使ってしまう。

「ねえはち……ま、ん？」

後ろのノベルスに行き、八幡に話しかけようとする、あいつを見かけてしまった。

「……………」

「……………」

お互いに沈黙。完全にここの空気だけ死んでいる。

しかし、互いが互いに向ける視線は明らかに違う。

私があいつに向ける視線は、敵意。あいつが私に向けるのはすがりような視線。

ここにいるのは得策ではない、むしろ私のストレスに変換されるのは間違いない。そう判断した私は、踵を返し八幡を探しに行こうとする。

「……………待って」

後ろから小さな、すがりような声が聞こえた。

周りの音で、かき消されそうなほど小さな声で。近くにいた私だからこそかろうじて聞こえたその声。

このまま無視するのが一番いい。
私はこいつに対して、怒りこそ湧けば、優しさなど一切湧かない。
なのに。

だけど。

それなのに。

「……なに？」

——どうして私は止まってしまったのだろうか。

私が止まったのを確認したあいつは、心なしか安心した顔でこちらを見つめる。

「……謝りたかった」

ぽつりと、独り言のようにつぶやく。

「ずっと。あの日、あの時、あの場所で言ってしまった言葉を」

一人の少女の懺悔は幼少のころから今もなお続く。

「あなたが傷ついている原因を知っていたのに。それなのに、私は「ふざけないで」っ!？」

ああ、本当に腹が立つ。

「変に希望を持たせるのも酷だから先に言っておくけど、私はお前を許す気はない」

冷徹に。冷酷に。希望は持たせず、作らせず。

私が言った言葉に、あいつは絶望したような顔でこちらを見つめる。

「あの時言った言葉が、もし本心じゃないと言っても、言葉にしている時点で心の底ではどこかで思ってるんだよ」

それだけ言うと、今度こそ私は振り向かずにその場を立ち去る。

さようなら、と心の中で思いつつ私は先ほど中止した八幡探しを再開する。

後ろからは小さな嗚咽音が聞こえた。